

ぶんこだより

子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

7 JUL
2026

「モーリス・センダック」



グリムの「ヘンゼルとグレーテル」(NHK 出版、2026 年)が、スティーヴン・キングの文とモーリス・センダックの絵の、「新しい物語」となって出版されています。ということは、かすかに知ってはいましたが、実際に手にしたのは、つい最近のことです。

それが、グリムの「ヘンゼルとグレーテル」の、どんな新しい物語なのかは、その「帯」の「幻の原画から、新しい解釈で紡ぐ決定版」と書いている、4人の文章に示されています。

「もはやこれがオリジナル版なのでは、と思わず錯覚してしまうほどの凄み。キングとセンダックの名人芸絵本だ」(五味太郎)

「弱いんじゃなく優しく、強いんじゃなく賢い物語。柔らかいのに何か心騒ぐ絵がどこまでも私たちを楽しませる」(永作博美)

「ぼかぼかと陽のあたる外側、暗くおそろしい内側、そして賢く勇敢な子どもたち。ある意味で私は、ヘンゼルとグレーテルのような子どもたちの物語を、これまでずっと書きつづけてきたのです」(スティーヴン・キング)

「すごい組み合わせ。こんな本が誕生したなんて。悪夢的な魅力を感じながら訳し

ました」(穂村 弘)

大人たち・その社会からは、出版された時、「なんだ！」と思われた「かいじゅうたちのいるところ」(著：モーリス・センダック、訳：じんぐうてるお／富山房、1975 年)は、原書で出版された時、子どもたちは、それを文句なく受け入れました。更に、その翌年のコルデコット賞に選ばれてやっと、認知されることになったのが「かいじゅうたちのいるところ」です。



それから 60 年、「スティーヴン・キングとモーリス・センダック」によって「新たにつくりだされました」ということでもう一つの「ヘンゼルとグレーテル」が登場することになりました。

五味太郎いわく、「もはやこれがオリジナル版」と言わしめる、「ヘンゼルとグレーテル」。

その「はじめに」に書かれている、スティーヴン・キングの「読者のみなさまに…」に、根っここのところでは、グリムから脱線もしないし、しかし、センダックが「かいじゅうたちのいるところ」で描いた「子ども理解」が、余すところなく描かれているのも、この新しい「ヘンゼルとグレーテル」です。

「…読者のみなさまには、この古くから伝わる物語に、わずかでも息を吹き込もうとする私のささやかな努力を楽しんでももらえればと願っていますし、外側はあたたかく内側は暗く冷たい、モーリス・センダックの芸術を味わっていただけることと思っています。ただ、その逆——暗い外側に、やさしく光る中心を秘めていることもあるけれど」(スティーヴン・キング)

この「闇と光」「光と闇」は、センダックの、「かいじゅうたちのいるところ」の「コルデコット賞受賞挨拶」の中で、繰り返し述べられてもいます。(「センダックの絵本論」脇明子、島多代訳、岩波書店の中に収められています)

それは、一方で、「文字が省かれ、そこを絵が語る、絵が省かれ、そこを言葉が語る。一言で言えば、これこそは絵本の発明」と語る、センダックの師匠がコルデコットであり、受賞挨拶は、そのコルデコットの絵本、及び子ども理解を語る言葉にもなっています。

「私にとっては、コルデコットの偉大さは、嘘もごまかしもない目で人生を洞察しているところにあります。彼の世界では真実が骨抜きされることは決してないのです。新鮮で活力あふれるその世界は、闇と光の織りなす陰影によって、忠実かつ率直に描き出されています。それは悲劇と喜びが共存する世界、それぞれが他を彩っている世界です」。

たとえば、どろを集め、どろだんご作りに夢中になる子どもたちは、一方で彼らの生きている現実には身近な誰かからの、に対する「...恐怖、怒り、憎しみ、欲求不満などの感情に常に脅かされている」、そんな現実と戦うため、夢中になることは必要で欠くことのできない時間なのです。

ここで「身近な誰かからの、に対する」と書きましたが、すべてにおいて「未知」のものである社会・世界、大人たちの作っている社会・世界における「恐怖と不安」、彼ら子どもたちが「常に全力を尽くして欲求不満と戦っている」世界・社会です。

「子どもたちがそれらから解放されるのは、空想によってなのです。それは、『かいじゅうたち』を飼ひ慣らすために彼らが持っている最上の手段なのです」（以上「」は、「センダックの絵本論」より）。

このコルデコット賞受賞挨拶では、出回っている「ある種の子どもの本」について、「真実を半分しか見ようとしない姿勢は、まったく恥ずべきものだと言わざるをえません」「この種の本の人気の高いのは、子どもの生活の厳しい面から顔をそむけようとする態度しかない日和主義...」と述べることも忘れていません。

たぶん、残念ながら、書店などで比較的目に付きやすい場所に並んでいたり、圧倒的に多い絵本は、このセンダックの「恥ずべき」であったり「日和主義」絵本に属しているように思えなくはありません。

こうどうぶんこに並んでいる、モーリス・センダックの絵本。

「かいじゅうたちのいるところ」（訳：神宮輝夫／富山房、1975年）

「わたしの兄の本」（訳：柴田元幸／集英社、2017年）

「まどのそとの そのまたむこう」（訳：脇 明子／福音館書店、2006年）

「まよなかのだいどころ」（訳：神宮輝夫／富山房、1982年）

「ロージーちゃんのひみつ」（訳：中村妙子／偕成社、1983年）

「ケニーのまど」（訳：神宮輝夫／富山房、1975年）

「もしもまほうがつかえたら」

（作：ロバート・グレイブス、訳：原もと子／富山房、1984年）

「ふふふん へへへん ぽん！」（訳：神宮輝夫／富山房、1987年）

「ちょうちよのためにドアをあけよう」

（文：ルース・クラウド、訳：木坂 涼／岩波書店、2018年）

「夜、空をとぶ」（文：ランダル・ジャレル、訳：長田 弘／みすず書房、2000年）

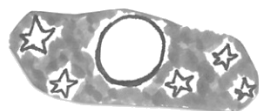
「けんかしちゃだめ！ かんじゃだめ！」

（作：E・H・ミナリック、訳：山下明生／佑学社、1986年）



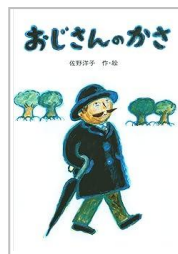
絵本とともに

～絵本とともに、子どもと歩む日々～



6月のまち食堂では、「おじさんのかさ」（作・絵：佐野洋子／講談社、1992年）を読ませていただきました。その日は晴れていていい天気だったのですが、梅雨の時期に読みたいと思っていた一冊でした。

「おじさんは、くろくてほそくてぴかぴかひかった傘が大好き！しかも、とってもとっても大好き！だから出かけるときはいつも傘を持っていました。そして、雨が降っても傘は差しません。それは…傘がぬれるからです。」傘がぬれるから傘を差さない！？こんな、少し変わったおじさんに、聞いているみなさんも思わず「くすっ」とされていました。雨の日、恵みの雨だと分かっているにもかかわらず、どうしても、出かけるのがおっくうになってしまうことも…そんな時に「雨」がテーマの絵本を読むのはいかがでしょう。傘が大好きなおじさんのことを思い浮かべると、雨の日が少し楽しくなるかもしれませんね。



また、ある日のこうどうぶんこでは、「たなばた」（再話：君島久子、画：初山 滋／福音館書店、1977年）を読ませていただきました。悲しくも美しい七夕の物語です。どうしておりひめと牛飼いは年に一度しか会えないのか、どうして七夕に雨が降るのか、透き通るような美しい絵とともにお話は流れていきます。季節のお話をじっくりと味わう。ぜいたくな時間を過ごさせていただきました。



「かいじゅうたちのいるところ」

（作：モーリス・センダック、訳：じんぐうてるお／富山房、1975年）



「お話の世界に入り込む」このことは、絵本を読む醍醐味ではないでしょうか。絵本を読み始めてから読み終えるまでは短い時間でしかありません。でも「お話の世界に入り込む」時間は、永遠のように感じます。この絵本は、決して長いお話ではありません。むしろ言葉は少ない方ですし、言葉のないページも6ページあります。最後のページに至っては、絵がありません。なのに「お話の世界に入り込む」ことができる、そんな絵本です。

子どもたちに絵本を読んでいてよく思うことがあります。「子どもたちはこのお話

を聞いて、どんなことを感じているのだろう。」ということです。それを子どもたちに聞くことは決してありませんが、頭の中をのぞいてみたいなあとは、時々思います。

マックスは、かいじゅうたちの王様になって普段では味わえない快感や楽しさを味わうのですが（マックスはかいじゅうたちに「こんなかいじゅうみたことない」と逆に言われるシーンもありますよ）、時が経つにつれて無性に会いたくなるのは、もちろん「やさしいだれかさん」。きっとどんな子どもたちも、マックスと同じような気持ちを感じたことがあるのではないのでしょうか。ずっとずっと、そばに置いておきたい1冊です。

「まよなかのだいどころ」

（作：モーリス・センダック、訳：じんぐうてるお／富山房、1982年）

「お話の世界に入り込む」では、こちらの絵本も負けてはいません！マックスがたどり着いたところは「かいじゅうたちのいるところ」でしたが、ミッキーがたどり着いたところは「まよなかのだいどころ」でした。そして私たちは知るのは「ぼくらがまいあさかかさずにケーキをたべられるわけ」を。

マックスもそうでしたが、ミッキーも自分の行動に迷いがありません。ミルクが足りないと分かったら、パンのねりこで飛行機をつくり、天の川（ミルクウェイ）までミルクを取りに行きます。そして自分の任務を終えたら、ぬくぬくのベッドへと帰っていくのです。ミッキーの大冒険は、そこで終了です。そう、マックスもミッキーも満足そうな顔をして、自分の寝室へと戻ってくるのです。

初めて読んだ時は、なんて不思議なお話なんだろうと思いました。読めば読むほど、ミッキーの行動に目が離せなく面白みが増してきます。そして「まよなかのだいどころ」から見える街の様子（NYの摩天楼でしょうか）が漫画チックで楽しいこと楽しいこと...お見逃しなく！

最後に、最近の息子との会話から。「（息子が）自分で読んだから、ママは読まなくてもいいかな？」「（自分で）読むのと、（人に）読んでもらうのは違うんだよ。」なるほどなるほど...納得すると同時に、嬉しい気持ちになりました。夏休みです。たくさん子どもたちが、絵本を楽しんでくれますように。

今月のつくって!あそぼう!

じゃがボール

ほしまつりでも、登場!
一度食べたら止まらない!
やみつきじゃがボール

【材料】20~22個分

じゃがいも 400g

片栗粉 大さじ3

パセリ(みじん切り) 大さじ1~2

塩 小さじ2/3

黒コショウ 適量

チーズ(モッツアレラなど) 適量

揚げ油 適量



【作り方】

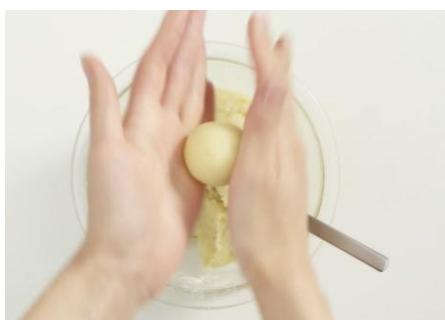
① ふかしたじゃがいもを、フォークなどで潰す。なるべくなめらかにすると、



②潰したじゃがいもに、パセリ、片栗粉、塩、黒コショウを入れて、よく混ぜる。



③チーズを包んで、丸める。(卓球のピンポン玉ぐらいのサイズ)



④こんがりと、カリッと揚げる。



簡単で美味しいから、
作ってみてね！

今月のわらべうた

♪ ばか かば まぬけ

ばか

かば

まぬけ

へっぽこなす

かぼちや

すっぱ

すっぱ

みそっぱ

あんた きらい

ふん！

ばか

かば

まぬけ

へっぽこなす

かぼちや

すっぱ

すっぱ

みそっぱ

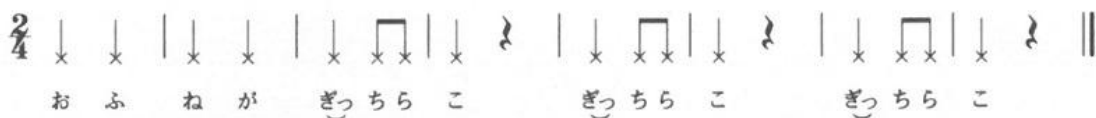
あんた すきよ

チュッ！



「おはなしのろうそく24」(東京子ども図書館編)より

♪おふねがぎっちらこ



♪どんどんばしあたれ



こうどうぶんこの児童文学（教会学校文庫）

～みんなにたくさんの本を楽しんでもらいたいから～

読書会でも読んでいる月本昭男先生の「物語としての旧約聖書」（NHK 出版、2024 年）の第 4 章は「大洪水」です。それは、創世紀のノアとその究極の物語です。物語では、人間の世界に愛想を尽かした神が、大洪水でノアと家族、そしてひとつがいの動物たちを、ノアたちが箱舟に寄せ、洪水の後、その他の生きものたちが滅び去った後の世界・大地に戻ってくるまで、それが創世紀の描く「大洪水」です。この大洪水が「ノアの箱舟」として、いくつかの絵本となっています。その絵本の中の「**ノアの箱舟**」（著：アーサー・ガイサート、訳：小塩 節、小塩トシ子／こぐま



社、1989年)を教会学校のお話で読み、教会の礼拝で紹介させてもらいました。

創世記の物語は、こんな具合です。「主なる神さまは、地上に人の悪が大きいのを見て心を痛められた。神さまはいわれた、

『わたしは、わたしの造った人を、地の表からぬぐい去ろう。人だけでなく、けものも地を這うものも空の鳥も。彼らを造ったことを後悔するからだ』。けれどもノアは、神さまのご好意を得た。」

ノアとその息子たちは、箱舟を作り、ついにはその箱舟に、ノアの家族と、「地上のすべての生き物が、ひとつがいつ」入って、洪水の海を漂流します。アーサー・ガイサートの箱舟は、その様子を、船の中の生きものたちの生活する様子を克明に描きます。

もう一つが、「**ノアのはこ舟**」(作・画:ピーター・スピア、訳:松川真弓/評論社、1986年)です。ピーター・スピアの「ノアのはこ舟」は、最初に「解説」の言葉があるだけで、絵が語る絵本になっています。その一つ一つが、とても克明にかつ、いっぱい何かを語るように描かれています。その何かは、「地上の動物のすべてから選ばれてきたものたち」は、ともかく、「選ばれなかったものたち」も、そのおびただしい動物たちが、箱舟に乗り込む動物たちを見送り、残されて海に沈んでいく事実、様子も描いていることです。

「残されて」ということでは、絵本ではありませんが、3羽のペンギンがいて、そのうちの2羽だけが箱舟に乗せてもらえるということで、「大騒ぎ」になるのが「**箱舟に8時集合!**」(作:ウルリヒ・フープ、画:イヨルク・ミューレ、訳:木本 栄/岩波書店、2022年)です。それって当然ドタバタになるのですが、そのドタバタを丁寧に描いたのが「箱舟に8時集合!」なのです。



こうどうぶんこ によこそ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」
(著：石井桃子／岩波書店、1965 年) に促されるように、教会礼拝堂の隅
っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始まりました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば
「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなの
です。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によこそ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年
より毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、な
ぞなど、言葉であそぶ時間です。

3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

4、貸出期間

2 週間

5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp





こうどうぶんこ



日時：毎週水曜日 15 時～16 時 45 分

場所：ぶんこの部屋（西宮公同教会付属 西宮公同幼稚園）



August 8 2026

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11 山の日	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

September 9 2026

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21 敬老の日	22 憲法の日	23 秋分の日	24	25	26
27	28	29	30			

編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きになりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤